

集英社版

世界文学全集

52

トルストイ
復活

集英社版 世界文学全集 52

復 活

一九七八年十二月二十日 印刷

一九七九年一月二十五日 発行

訳 者 工藤精一郎

編 集 株式会社 綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三六―五
電話 (〇三) 二三九一三八

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二五―一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇一六三六
販売部 (〇三) 二三八一二七八

印刷所 凸版印刷株式会社



目次

復活

後記・注解

年 解 説
譜

工藤精一郎訳

工藤精一郎

471 463 459 3

復

活

マタイによる福音書第十八章

そのとき、ペテロがイエスのもとにきて言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」イエスは彼に言われた。「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい」

マタイによる福音書第七章

なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁はりを認めないのか。

ヨハネによる福音書第八章

あなたヒがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい。
ルカによる福音書第六章

弟子はその師以上のものではないが、修業をつめば、みなその師のようになろう。

第 I 部

1

何十万という人びとがせまい場所に寄り集まって、自分たちがひしめきあっている土地を片輪なものにしようと思ふほどほねをおつても、なにも生えさせないようにしようと思ふほど石を敷きつめても、わずかな隙間から芽を出す草をどれほど摘みとつても、石炭や石油の煙でどれほどいぶしても、どれほど木々の枝を切りおとして動物や小鳥を追いはらつても、——都会でさえ春はやはり春であつた。太陽があたためると、草は生氣をとりもどして芽をふき、根が残つていさえすれば、並木道の芝生はもとより、敷石のあいだにも、いたるところに緑が萌え、白樺も、白楊も、桜桃もそのねばりつくようなぐわしい若葉をひろげ、菩提樹ははじけた若芽をふくらませた。小鳥や雀や鳩たちは春をむかえてもう嬉々として巣づくりをはじめ、蠅は壁の

日だまりにジージーうなっていた。草木も、小鳥も、虫も、こどもたちも楽しそうだった。だが人びとは——大人たちは——いろいろと思いあぐねて自分を苦しめたり、たがいに苦しめあつたりすることをやめなかった。人びとは神聖で重要なものは、この春の朝でも、万物のしあわせのためにあたえられる神の世界のこの美しさ——平和と和合と愛に人の心を誘うこの美しさでもなく、たがいに相手を支配するために、自分の頭で考えだしたものが、神聖で重要なものなのだと思ひこんでいた。

それで、県の刑務所の事務室でも、神聖で重要なものは生きとし生けるものに春の感動と喜びがあたえられたことではなく、昨夜受領された、何々の件と表記されて封印と番号を付された書類が、神聖で重要なものとされた。そこには本日、つまり四月二十八日午前九時までに拘留中の未決囚——女囚二名と男囚一名を出廷せしむべしとあつた。女囚のひとりとは、重要容疑者として、あとの二名とは別に連行しなければならなかった。そこで、この命令にもとづいて、四月二十八日の朝八時に、むんむんと悪臭のこもっている薄暗い女囚監房の廊下へ、看守長がはいっていった。金モールの袖章のついた上衣を着て、青いへりのある帯で腰をしめた、疲れきつたような顔をした、白いもののめだつちぢれ髪の女が、そのあとにつづいた。これは女看守であつた。

「マースロワを呼びますか？」当直看守といっしよに廊下に向いている監房の扉のひとつのまえに近よりながら、女看守がきいた。

看守は鉄の音をがちやがちやさせて、鍵をはずし、監房の扉をあけると、廊下よりもひときわはげしい悪臭がきつと流れてくるのをまともにあびて、どなった。

「マースロワ、出廷だ！」そしてまたすぐに扉をしめて、出てくるのを待った。

刑務所の庭にさえ、風によって都会へはこばれてくる、生気をあたえるさわやかな野の空氣があつた。ところがこの廊下にむんむんしているのは、排泄物やタールや腐敗物の悪臭のしみこんだ、胸のむかつくようなよどみきつた空氣で、新しくはいってきた者はたちまち重いしずんだ氣分にひきこまれてしまうのだった。庭からはいってきた女看守も、汚れた空氣には慣れきつていたはずなのに、やはりこうした氣分にひきこまれた。彼女は廊下へはいったとたんに、ぐっと疲労がよどむを感じて、吸いこまれるような睡氣におそわれた。

監房のなかはざわざわしだして、女の声々や、素足でべたべた歩きまわる音が聞こえた。

「早くしろ、なにしてる、さつさとせんか、おい、マースロワ！」と看守長が監房の扉口にどなった。

二分ほどすると、白い上衣と白いスカートの上に灰色の

上つ張りをひっかけた、あまり背の高くない、ひどく胸の豊かな若い女が、元氣よく扉の隙間から出てきて、くると向きなおると、看守のそばに立った。女は麻織りの靴下をはいて、その上に囚人用の毛皮靴をはき、頭は白いショールでつつんでいたが、その下から、明らかにわざとあやをつけたらしく、波打つ黒い髪の小さな房がこぼれていた。女の顔は、長いこと室内にばかりこもっていた人によく見られるような、際立った白きで、地下蔵の馬鈴薯の芽を思わせた。小さな肉づきのいい手も、上つ張りの大きな襟のなかに見える白いふくらした首筋も、やはり際立って白かった。顔のなかでとくに人目をうばうのは、そのしずんだ蒼白さに対照して、真っ黒い、きらきら光る、いくぶんはれぼったいがおどろくほど生き生きとした目で、片方がすこし斜視氣味だった。彼女は豊かな胸を突きだすようにして、きつと背筋をのばしていた。彼女は廊下へ出てくると、わずかに首をかしげて、まっすぐに看守の目を見て、なんでも言われたとおりに実行する姿勢をとった。看守がもう扉をしめかけたとき、なかから白髪のをひつつめにした、あおぎめたきびしいしわだらけの老婆の顔が突きだされた。老婆はマースロワになにやら言いだした。しかし看守はかまわず老婆の顔にむかつてたたきつけるように扉をしめた。老婆の顔が消えた。房内で女の声がけたたましく笑った。マースロワもにやりと笑って、扉の小さな格子

窓のほうをふり向いた。老婆はなかからのぞき窓にはりついで、しゃがれ声で言った。

「いちばんは——よけいなことは言わんことだよ、ひとつことだけ言って押しとおせば、それでいいのさ」

「そりやもうなにかひとつだけ言ってりや、これより悪くはならんだろうさね」とマースロワは頭を振って言った。

「ひとつにきまつてるさ、ふたつもあるわけがない」と看守長はいかにも上司らしく、自分のうまい言葉に感じいったようにぞんざいに言った。「わたしのあとについてこい！」

のぞき窓に見えていた老婆の目が消えた。マースロワは廊下の中央へ出て、ちょこちょこ小刻みに看守長のあとから歩いていった。彼らは石段をくだり、女囚監房よりさらに悪臭がひどく、騒がしい男囚監房のまえを、どの扉のぞき窓にもぎらぎら光る目に迫われながら通りぬけると、事務室へはいった。そこにはもう銃をもった二名の護送兵が立っていた。机のむこうにすわっていた書記が護送兵のひとりに煙草のにおいのしみこんだ書類をわたすと、女囚をあごでしゃくって、言った。

「ひきつけ」

兵士は——あばたのある赤ら顔のニージェゴロド出の百姓である——書類を外套の袖の折り返しにさしこむと、頬骨の張ったチュウシ人の連れの兵士を見て、女囚のほうに

片目をつぶってみせた。護送兵たちは女囚をはさんで階段をくだり、正門のほうへ歩いていった。

正門の扉のくぐり戸が開いた。そして、彼ら三人はくぐり戸の敷居をまたいで外庭へ出た。そしてさらに刑務所の構内を出ると、町のなかの舗装道路をすすんでいった。

辻馬車の御者や、小店の親父や、料理女や、職人や、役人たちが立ちどまって、珍しそうに女囚をふり返った。なかには首を振りながら、『悪いことをするとあんなさまになるんだ、おれたちみたいにまじめにしてりや無難なのに』などと考える者もあった。こどもたちは恐ろしそうに悪い女をながめたが、それでも兵士たちがついていけるからもうなにもできないと思って、やっと安心するのだった。村から炭を売りにきて、帰りがけに安食堂で茶を飲んでいったひとりの百姓が、女囚のそばへ寄ると、十字を切って、一コペイカ玉をめぐんだ。女囚は顔を赤らめて、頭を下げながらなにやらつぶやいた。

自分がみんなに見られているのを感じると、女囚は頭を動かさずにそっとそちらへ横目をすべらせた。そして自分が注視的になっていることがうれしくなった。監房のそれとはくらべものにならないさわやかな春の気も、彼女の気持ちをほれやかにした。しかしもう歩き忘れてしまった石の舗道を、不細工な囚人用の毛皮靴をひきずって歩くのはつらいことで、彼女は足許へ目をやりながら、できる

だけ軽く歩こうと気をはっていた。粉屋のまえにさしかかると、だれにも追われたことのない鳩が数羽よちよち歩きまわって餌をつついていたが、女囚はそのなかの一羽を片方の足で危く踏みつけそうになった。鳩はさっと飛びたつと、あわただしく羽ばたいて、女囚のすぐ耳許をかすめ、顔に風をふきかけて飛び去っていった。女囚はにこっと笑ったが、すぐに自分のいまの身の上を思いだして、重い溜息をついた。

2

女囚マースロワの生い立ちはごくありふれたものであった。彼女は屋敷づとめをしている亭主のいない女の娘として生まれた。その女は、ふたりの姉妹の女地主の領地で家畜番をしている母親といっしょに暮らしていた。この亭主のいない女は毎年こどもを生み、そして、村ではごくあたりまえのことだが、こどもに洗礼は受けさせるが、望みもしないのに生まれたிரらないこどもは、仕事のじやまになるというので、母が乳をやらないで放っておくために、こどもは飢えのために死んでしまうのだった。

こうして五人のこどもが死んだ。みな洗礼は受けたが、その後食べ物にあたえられなかったので、死んだのである。通りすがりのジプシーに生ませられた六番めの赤ん坊は、

女だった。そして同じような運命をたどるはずであったが、たまたま地主の老嬢姉妹のひとりがクリームが牛くさいと叱言をいうために家畜小舎へ立ちよった。小舎のなかには可愛らしい丈夫そうな赤ん坊を抱いた産婦が寝ていた。老嬢はクリームにも、産婦を家畜小舎へ入れたことにも、きつく叱言をいって、出ていきかけたが、ふと赤ん坊に目をとめると、すっかり心を動かされて、教母（洗礼の保証人）になつてやろうと言いだした。彼女はこの赤ん坊に洗礼を受けさせてやり、その後自分の洗礼子をふびんに思つて、母親に牛乳とお金をくれてやった。こうしてこの女の子は生き残つたのである。それで老嬢姉妹はこの子を『救われた娘』と呼ぶことにした。

こどもが三つになったとき、母が病みついて、死んだ。家畜番の婆さんが孫娘をもてあましたので、老嬢姉妹が手許にひきとつた。黒い目の少女は並みはずれてきびきびした可愛らしい娘になつたので、老嬢たちはその成長を楽しみにしていた。

老嬢はふたり姉妹で、妹のほうはソーフィヤ・イワーノヴナといつて、氣だてもやさしく、少女に洗礼を受けさせてやったのも彼女のほうであった。姉はマリーヤ・イワーノヴナといつて、気性が妹よりきびしかった。ソーフィヤ・イワーノヴナは少女にきれいな服を着せたり、本を読むことを教えたりして、ゆくゆくは養女にしたいと思つていた。

マリーヤ・イワーノヴナのほうは少女をよく働くい小間使にしたてあげたい意向だったから、しつてもきびしくなかったり、きげんのわるいときにはぶったりまでした。こうしてふたりのあいだにはさまれて育ったから、少女は年ごろになると、半分小間使のような、半分養女のような娘になった。だから、呼び名もカーチカ(称卑)でも、カーチエンカ(称愛)でもなく、そのなかをとってカチューシャと呼ばれた。彼女は縫い物をしたり、部屋の掃除をしたり、みがき粉で聖像をみがいたり、コーヒー豆を煎って挽いて、コーヒーを出したり、ちよっとしたものを洗ったりもしたが、ときには老嬢たちといっしょにすわって本を読んでやったりもした。

彼女を嫁にと望む者もあったが、彼女はだれのところへもいく気がなかった。縁談の相手がみな力仕事の貧しい人びとなので、地主生活の気楽さにあまやかされた彼女には、そうした人びとと暮らすのがつらいことであろうと思われたのだった。

こんな生活が彼女が十六歳になるまでつづいた。彼女が満十六歳になったとき、主人の老嬢たちのところへ甥ハルカにあたる大学生で、富裕な公爵が遊びにきた。そしてカチューシャは彼に打ち明けることはおろか、自分の胸にさえはつきり言う勇氣もないままに、彼に恋してしまったのだった。それから二年後、この甥が戦場へおもむく途中伯母たちの

屋敷に立ちよって、四日間滞在したが、出立の前夜カチューシャを誘惑した。そして翌朝彼女の手にも百ルーブリ紙幣一枚をつかませて、出立した。彼が立ち去ってから五か月後に、彼女は自分が身ごもったことを知った。

そのとき以来彼女にはなにもかもういやになってしまった。そして彼女は、自分を待ち受けている恥辱からどうしたらまぬかれることができようと、いちずに思いつめて、女主人たちへの務めも気がしづりがちで、おろそかになつたばかりでなく、どうしてそんなことになったのか、自分でもわからなかったが、――むしろくしゃして突然怒りを爆発させてしまった。彼女は女主人たちにひどく乱暴な言葉を投稿つけた。それはあとで自分でもくやんで、暇をくれと願ひ出した。

女主人たちも、見かねていたので、これさいわいと暇をだしてしまった。そこを出ると彼女は地方警察署長の家に小間使にはいったが、そこも三月しかつづかなかつた。というのは署長は五十すぎの老人のくせに、彼女の尻しりを追いまわしはじめて、あるときあまりしつこく口説いたので、彼女はつかつかとなつて、ばかだの、ひひ爺じいだのとのしりちらして、いきなり胸を突きとばしたら、相手はもろにひっくりかえってしまった。彼女は乱暴を理由に追いだされた。もう産月うぶづきが近かつたので、勤めに出ようにも出るわけにいかず、彼女は村で酒をあきなつていた後家の産婆の

ところにやっかいになった。お産は軽かった。ところが産婆が村で病気の産婦のお産をあつかって、カチューシャに産褥熱をうつしたために、生まれた男の子は養育院へやられることになった。連れていった老婆の語るところでは、赤ん坊はむこうへ着くとすぐに死んだということだった。

産婆の家に世話になりになったとき、カチューシャが所持していた金は百二十七ルーブリだった。二十七ルーブリは——働いて貯めた金で、百ルーブリは誘惑者からもらった分である。そこを出たとき、彼女の手許にはわずか六ルーブリしか残らなかった。彼女は金をだいじにすることができないたちで、自分でもつかったし、請われればだれにでもくれてやった。産婆は二月の生活費——食事と茶の代金——として四十ルーブリとったし、二十五ルーブリは赤ん坊をあずけにやるのにかかったし、産婆がさらに雌牛を買うからと四十ルーブリ借りたし、着るものとか、お茶菓子とかで二十ルーブリほどとんでしまったので、カチューシャが床ばなれをしたときは、金がほとんどないありさまで、すぐにも勤め口をさがさなければならなかった。山林官の家に住み込みの口が見つかった。山林官は女房もちだったが、署長のときとまったく同じように、最初の日からカチューシャにまつわりつきはじめた。カチューシャはこの男がいやでたまらないで、つとめて避けるようにしていた。ところが男のほうが経験があるし、ずるいし、そのう

え——主人だから、ここぞと思うところへ彼女を使いに行ることができた。というわけで、機を見て、まんまと彼女をものにしてしまった。女房がそれをかぎつけた。そしてあるとき部屋に夫とカチューシャがふたりきりでいるところを見つけて、カチューシャになぐりかかった。カチューシャもまけていなかった。そしてつかみあいのけんかがはじまり、そのあけく彼女は給金も払われずに追いだされた。そこでカチューシャは町へ出て、伯母のところへ身をよせた。伯母の亭主は製本屋で、以前はいい暮らしをしていたが、いまは得意先をすっかりなくしてしまって、手あたりしだいになにかもすつかり酒にかえて、飲んだくれていた。伯母はささやかな洗濯屋をいとなんで、そのあがりでもどもたちを養い、身をもちくずした亭主を支えていた。伯母はカチューシャに店の洗濯女になることをすすめた。ところが、伯母のところに住みこんでいる洗濯女たちのつらい生活を見ると、カチューシャはしぶって、口入れ屋をまわって女中の口をさがした。ふたりの中学生の息子と暮らしているある夫人の家に口が見つかった。彼女が住み込んで一週間ほどすると、うつすらと口ひげをはやした、中学六年になる上の息子が、勉強をうつちやらかしてしまって、カチューシャにうるさくつきまとい、気を休めるひまもあたえなくなった。母夫人はなにかもカチューシャのせいにして、おはらいばこにしてしまった。新しい口は見つか

らなかったが、たまたま口入れ屋でカチューシャは、肉づきの豊かなあらわな手に宝石の指輪と腕輪をつけたひとり婦人に出会った。婦人はカチューシャが勤め口をさがしていることを知ると、自分のアドレスをわたして、たずねてくるように言った。カチューシャは婦人をたずねた。婦人はやさしく彼女を迎え入れて、ピロシキやらあまいぶどう酒やらをご馳走し、女中に手紙をもたせてどこかへ使いにやった。夕方、白いもののまじった髪を長くのばして、白いあごひげをはやした背の高い男が部屋へはいってきた。この老人はすぐにカチューシャのそばにすわって、目を光らせ、にやにや笑いながら、彼女をじろじろながめたり、ざれ口をきいたりしはじめた。夫人は彼を次の間へ呼んだ。そして『田舎でとれた、生きのいい上玉だよ』と言っている婦人の声が、カチューシャの耳に聞こえた。それから婦人はカチューシャを呼んで、この人は作家で、たいそうな金持だから、あなたを気に入ったら、お金はちっとも惜しまないんだよ、と言った。彼女は氣に入られた。そして老人はときどき会うことを約束させて、二十五ルーブリ彼女にわたした。この金は伯母の家で借りになっていた食費と、新しい服や帽子やリボンなどの支払いにたちまち費消されてしまった。二、三日すると作家はまた彼女を迎えに使いをよこした。彼女は出かけていった。作家はまた二十五ルーブリを彼女にわたして、独立した住居に移るようにすず

めた。

作家が借りてくれた住居に移ってしばらくすると、カチューシャは同じ建物に住む気さくな店員とねんごろになった。彼女がそれを作家に打ち明けて、別な小さな部屋に移った。ところが店員は、結婚すると約束しておきながら、彼女にだまって姿をくらましてしまった。どうやら、彼女をすてて、ニージニイ市へ逃げてしまったらしい。こうしてカチューシャはまたひとりぼっちになった。彼女はその部屋にひとりで暮らすうと思つたが、それは許されなかった。区警察署の署長が、黄色い鑑札をもらって検診を受けなければここに暮らすわけにはいかないと言った。そこで彼女はまた伯母のところへもどった。伯母は彼女が流行の服装をして、すてきなコートをほおり、美しい帽子をかぶっているのを見て、もう生活の程度がずつと高くなつてしまったものと思ひ、おそろおそろ迎え入れて、もう洗濯女になれとはすすめなかった。カチューシャにしても洗濯女になろうかなどという考えは、いまはもうてんから頭になかった。彼女はいまは痛ましい思いで、顔色のわるい、細い腕の洗濯女たちが仕事部屋でくついている苦役のような生活をながめるのだった。女たちのなかにはすでに肺をおかされている者も何人かいて、夏も冬も窓をあけっぱなしの三十度の石鹼くさい湯気のなかで洗ったり、アイロンをかけたりにしていたが、ひよっとしたらこの苦役の生活には

いつていたかも知れないのだと思うと、彼女はぞっとするのだった。

そしてちょうどそのころ、パトロンが見当たらないでいたカチューシャにはまことに折悪しく、妓楼に女の世話をする女衞の婆さんがカチューシャに目をつけたのである。

カチューシャは煙草はもうだいたい前から吸っていたが、最近店員とできて、そしてすてられてからというもののは、酒もおぼえて、しだいに無茶飲みをするようになった。彼女が酒にはしつたのは、その味をおぼえたせいもあるが、それよりもこれまでなめてきた苦い思いをすっかり忘れさせてくれたし、胸のしこりがとれて、自分だつてすてたものではないと大きな気持ちになれるからだつた。酒を飲まなければとてもそんな気持ちにはなれなかつた。酒がはいっていないときは彼女はいつも自分が恥ずかしくて、くよくよ氣に病んでいた。

女衞の婆さんは伯母にご馳走をし、カチューシャにしきりに酒をふるまって、市内で一流の店に出るようにすすめて、その境遇の結構な利点を洗いざらいならべたてた。あるいはいやしい女中の身分にとどまって、まずまちがいなく男たちにつけねらわれ、ときどきひそかな情事の相手をさせられるか、あるいは保証された合法的な安定した境遇に落ちついて、公然と、法律で認められた実入りのいい常時の姦淫にふけるか、カチューシャはその選択をせまられた。

そして彼女は後者を選んだ。それだけではなく、彼女はこの道を選ぶことによって自分を誘惑した青年にも、店員にも、その他彼女に悪いことをしたあらゆる人びとに復讐しようと思つたのである。また彼女の心を盲させ、最後の決心をする原因のひとつになったのは、ビロードであらうと、デシンであらうと、絹であらうと、肩と腕のむきだしの夜会服であらうと——望みどおりの衣装がこしらえられるという婆さんの言葉であつた。そして黒いビロードの飾りのついた萌黄色の絹のデコルテを身につけた自分の姿を想像したとき、カチューシャはもうたまらなくなつて、居住証をわたしてしまつた。その晩女衞の婆さんは辻馬車を呼んで、キターエワという女將の経営する有名な妓楼へ彼女を連れていった。

そしてそのときからカチューシャにとつて、神と人間の戒律にそむく慢性的犯罪の生活がはじまつたのである。それは何十万人という女たちが、国民の幸福を配慮する政府によつて単に許されるばかりか、かえつてその庇護の下にいとなみ、十人のうち九人までが苦しい病氣にかかり、年齢よりも早く衰え、みじめに死んでいくような生活なのである。

深夜の躁宴のあとにくる昼すぎまでの泥のような眠り。二時か三時すぎにぐったりとけがれたベッドから起きだし、酔いざましの鉾水とコーヒーを飲み、部屋着かジャケ

ットかガウンだけのだらしない格好で、ものうげにあちらこちらの部屋をまわって歩き、窓のカーテンのかげから外をのぞいたり、張りのないにこった声で口ぎたなく仲間とののしり合ったりする。それから顔を洗い、お化粧をし、身体と髪に香水をふりかける。衣装の仮縫いをする。そのことで女将とやり合う。鏡のまえにすわりこんで顔の仕上げをし、眉を描く。精のつくあぶらっこい食事をとる。それから身体がすくえてみえるような明るい色合いの絹の衣装をつけて、けばけばしく飾られた目もまばゆいほどに明るい広間へ出る。客が来る。音楽が鳴り、ダンスを踊り、ボンボンを食べ、ワインを飲み、煙草をくゆらし、そして客をとる。青年、中年者、半分こどもみたいな少年、よぼよぼの老人、独身者、妻帯者、商人、店員、アルメニア人、ユダヤ人、タタール人、金持、貧乏人、丈夫な者、病人、酒を飲んでいる者、しらふな者、乱暴な者、やさしい者、軍人、文官、大学生、中学生——あらゆる階級、年齢、性格の男たちである。こうしてどなり声と悪ふざけ、つかみあいと音楽、煙草と酒、酒と煙草、夕方から夜明けまで鳴りっぱなしの音楽。朝になってやっと解放され、重苦しい泥のような眠り。これが一週間とおして毎日くりかえされる。週の終わりに国家の施設である警察署へ行く。そこでは国家の勤務についている役人である医師たち、つまり男

どもがときにはしかつめらしい顔をして、嚴重に、ときに

はにやにや笑いながらふざけ半分に、罪を防ぐために人間はもとより動物にまで自然によってあたえられている羞恥心を殺して、これらの女たちを検診し、彼女たちが一週間のあいだその共謀者たちとおかしつつけてきた犯罪の続行の免許証をあたえる。そしてまた同じような一週間がくる。これが毎日、夏も冬も、平日も祭日も、休みなくくりかえされるのである。

こうしてカチューシャは七年暮らした。その間に彼女は二度店を替え、一度病院にはいった。妓楼に出てから七年め、最初の墮落からかぞえて八年め、つまり彼女が二十六になったときに、彼女が獄につながれる原因となった事件が起こった。そして人殺しや泥棒たちと六か月も雑居房に入れられていたあげく、いま、やっと法廷へ引き出されることになったのである。

3

カチューシャが遠い道のりに疲れたてて、護送兵とともに地方裁判所の建物に近づきつつあったころ、彼女の養い親である女地主たちの甥で、彼女を誘惑した当のドミートリイ・イワノヴィチ・ネフリュードフ公爵は、まだスプリングのきいた、寝じわのよった高い自分のベッドの上で、ふかふかの羽根ぶとんにうずまったまま、胸のひだにきち

んとアイロンのあたったオランダ製のきれいなパジャマの襟をはだけて、煙草をくゆらしていた。彼は動かぬ目をぼんやり前方に向けたまま、きょうこれからすること、きのうあったことを考えていた。

彼は、その令嬢と当然結婚するものとみんなに予想されていた、富裕で名門のコルチャーギン家ですごした昨夜のことを思いだすと、ほっと溜息をついて、吸い終わった煙草をすて、銀のシガレットケースから新しい煙草をぬきとうとうしかけたが、思いなおして、ベッドからすべすべした白い足を下ろし、スリッパをさぐると、豊かなまるまるとした肩に絹のガウンをはおり、重々しいが早い足どりで、寝室につづいている、エリクシルや、オーデコロンや、コスメチックや、香水などの人工的なかおりにみちている化粧室へはいっていった。そこで彼はそちこちに充填のほどこされた歯を特製の歯磨粉でみがくと、かおりのいいが水で口をすすぎ、あちらこちらとくまなく洗いながら、つぎつぎとタオルをとりかえてこすりはじめた。匂いのいい石鹸でいいねいに手を洗い、格好よくのばした爪を小さなブラシでたんねんにみがき、大きな大理石の洗面台で顔と肉づきのいい首筋を洗うと、彼はさらにつぎの部屋へはいっていった。そこはシャワー室になっていた。そこで肉づきのいいあぶらぎった白い身体を冷たい水で洗い、けばだったバスタオルですっかりふきとると、きれいにアイロ

ンのあたったさっぱりした下着をきて、鏡のようにぴかぴかにみがかれた短靴をはき、化粧鏡のまえにすわって、あまり大きくないちぢれた黒いあごひげと、額のほうが薄くなりかけたくせのある髪を、二本のブラシでとかしはじめた。

彼のつかっているすべての装身具は、肌着も、服も、靴も、ネクタイも、ピンも、カフスボタンも、最高級の品質のもので、しぶくて、めだちはしないが、もちのよい高価なものであった。

十組もあるネクタイとピンの組合せのなかから、手にふれたものを適当に選びだして、——かつてはあれやこれやと選ぶことが珍しく、楽しみであったが、いまはもうそういうことはまったく関心がなくなっていた、——ネフリュードフはきれいに手入れされて椅子の上に用意されていた服を着ると、いくぶん頭の重さは残っているが、さっぱりして、香水の匂いにつつまれて、きのう召使が三人がかりで嵌木床をみがきあげた細長い食堂へはいっていった。そこには大きな檜の食器棚がおいであり、これもやはり大きな繰り出しテーブルが、獅子のあしを型どった四本の足をどっしりと張りひろげて踏まえていた。テーブルは同家の頭文字のついた薄地の糊のきいたクロースでおおわれ、その上にかおり高いコーヒーのはいった銀製のポット、同じく銀製のさとう壺、熱いクリームを入れた容器、焼きたて